◎トークイベント
中原中也賞詩人による
ブックトーク
三角みづ紀 × 暁方ミセイ

◎特別寄稿1
中也賞に寄せて
「これから愛します、
中也のように」
三角みづ紀

「暗中の光」
暁方ミセイ

◎特別寄稿2
写真展「さやかに風も」
に寄せて
下瀬信雄

◎特別企画展
「中原中也と日本の詩」

◎企画展
企画展Ⅰ「中原中也記念館の20年」
企画展Ⅱ「中原中也 歩みのリズム
—〈僕は街なぞ歩いてゐました〉」
下瀬信雄写真展「さやかに風も」

◎テーマ展示
「中也 祈りの詩」

◎館報第20号記念
寄稿記事・特集総目次

◎記念館ニュース
開館20周年事業

主なできごと（平成26年度 行事記録）
第20回中原中也賞受賞作品
平成27年度 行事予定

中原中也記念館
館報2015

20

Public relations magazine
第20号

Chuya Nakahara Memorial Museum

第10回中原中也賞受賞

三角みづ紀

中原中也賞詩人による ブックトーク

第17回中原中也賞受賞

暁方ミセイ

平成26年9月15日、中原中也賞受賞詩人の三角みづ紀さんと暁方ミセイさんの対談が行われました。会場は湯田温泉にある喫茶ぽなーる。レトロでくつろいだ雰囲気の中で、自作のこと、詩を書くことなど、詩人ならではのお話を伺いました。

―中也の影響について

暁方　今日は、最初に自己紹介がてら朗読をして、普段はあまり自作解説をしないのですが、軽く制作の裏話をしようと思います。

三角　詩人同士だと、すぐに理解し合えることもあるのですけど、読者の方は、「あっ、そうだったんだ」ということもあるのかなあと思いまして。それでは、ミセイさんからお願いします。

暁方　もう3年くらい前になりますが、第一詩集の『ウイルスちゃん』(平成23年、思潮社)という詩集で、中原中也賞をいただきまして、その中の「世界葬」という詩を読みます。

暁方ミセイさん

世界葬

しずかに　雪が降ってくる
ゆっくりと
光りながら（あるものは円を描き
（またあるものは溶けて消え
雪が降ってくる
そとはなにもきこえない

わかるのは
わたしいま　脈打っているということ

静寂のなかを
雪が降ってくる（真っ青な空から
（あるものは円を描き
（またあるものは溶けて見えなくなった

まばゆい飽和だ
こんなに
朝の底の
ひかりの堆積層へ降る、
雪は
万遍なく
血汐のなかへも
降りてくる

ほのかな熱が頬のうえに降る
樹林や薄氷や、凍えた反射光と
同じ属性にある
わたしはからだ
絶え間もなく、
あたたかいからだ

雪が降ってくる
あかるい、
真っ青な空から（あるものは円を描き
（あるものはまた空へ舞い上がり
雪が
降ってくる
（光りながら　脈打ちながら
すべての輝かしい現実が
わたしへとまるまってゆく

一昨日の中原中也の会大会のトーク［＊1］の時に、三角さんと私とで、お互いの作品から中也っぽい詩を選んでこようと約束してきたのです。私はたぶんこの詩を選ばれるのではないかなあと思っていたのですが。

三角　違いましたね。

暁方　中也の「雪が降ってゐる……」［下段参照］を意識して書いたわけではなかったのですが、たぶん潜在的に覚えていて、こういう詩になったのだと思います。

実はこれは、かなり昔に書いたものをもう1回焼き直して書いた詩です。中学生の時、夜中にインターネットのURL欄に適当なアドレスを打ち込んで、ランダムにページを表示させてみるという遊びを毎日やっていたんです。ある時、音楽を配信しているらしいサイトにたどり着いたのですが、ただ黒い画面でずっと音楽が流れて、雪がアニメみたいにひたすら画面上部から降ってきていて……。13、14歳ぐらいの時にその音楽を聴いて思ったことを詩に書いたのですが、それを、20歳頃にもう一度、思い出しながら書いた詩でした。

三角　今のお話を聞いて、私はこれを読もうと思った詩があります。中原中也に影響を受けて書いた詩はおそらくないのですが、これは違う方の詩が潜在意識のようにずっと残っていて書いたのだということに、最近気づいた作品です。

終焉＃9

とても　むずかしいひと
あなたって
とても　むずかしいひと
おかしいの

なだらかな山のようになる
緩急ならして
わたしたちの感情が
堆積されていく

また白木蓮が咲いた
視覚にうったえる
うれしそうに並ぶ
またおなじ白木蓮が
やきつく
一度は散ったものなのに
おかしいの

十年たったら
何がかわるだろう
百年たったら
何かがかわるだろう
千年たっても
あなたって　むずかしいひと

垣根の向こうは留守だ
おかしいの

雪が降つてゐる……

中原中也

雪が降つてゐる、
　とほくを。
雪が降つてゐる、
　とほくを。
捨てられた羊かなんぞのやうに
　とほくを、
雪が降つてゐる、
　とほくを。
たかい空から、
　とほくを、
とほくを
　とほくを、
お寺の屋根にも、
　それから、
お寺の森にも、
　それから、
たえまもなしに。
　空から、
雪が降つてゐる
　それから、
兵営にゆく道にも、
　それから、
日が暮れかゝる、
　それから、
喇叭（らつぱ）がきこえる。
　それから、
雪が降つてゐる、
　なほも。

（一九二九・二・一八）

暁方　今、考えていたのですけど、わからなかった。どなたの影響？

三角　高橋新吉の「るす」です。私、高橋新吉が非常に好きで。「るす」という詩がありまして、〈留守と言へ／ここには誰も居らぬと言へ／五億年経つたら帰つて来る〉っていうのが好きすぎて、何度も何度も朗読していたのですが、影響を受けていることに気づかないでこの詩を書いていました。十年、百年という時間の流れも書いて。でも、〈五億年〉って言われたら、全然十年、百年、千年じゃ届かないなって。

　中也賞詩人なのに、私は高橋新吉が大好きで、ミセイさんは宮沢賢治が大好きなのですよね？

暁方　そうですね（笑）。

―推敲について

暁方　三角さんは『隣人のいない部屋』（平成25年、思潮社）でこのたび萩原朔太郎賞を受賞されました。おめでとうございます。せっかくなので、もう1篇、この詩集から読んでいただいてもいいですか？

三角　では、この『隣人のいない部屋』という詩集の一番短い詩を読みます。

三角みづ紀さん

くろうたどり

このあたりは
鳥の巣が多いが
はんぶんは留守だ
口笛をふきながら
おしえてくれる

わたしとあなたが
一度だけもどる場所
口笛をふく余裕もなく
はりつめたまま
枝をはこんで
そっぽを向いて
手をつないで眠る場所

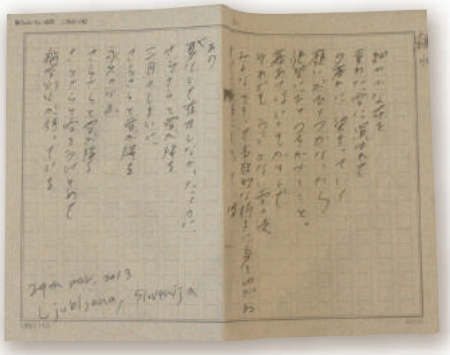
　これは、4週間の旅の間に毎日1篇の詩を仕上げていくという、自分の中の決心で作った詩集なのですが、もとより、推敲ということを私はめったにしないのです。ミセイさんはあとから書き直すことはありますか？

暁方　推敲魔ですね。原稿が既発表になってからも思い出して直してしまって、しかもデータの上書き保存をしてしまうので、いざ詩集を出す時に大変（笑）。

三角　この詩集のカバーをはずすと……。

暁方　あ、それ気になっていました。

三角　手書きの原稿用紙です。旅先に原稿用紙を持って行って、毎日書きました。中也記念館でも肉筆原稿が展示してあって、かっこいいですよね。それで、私も肉筆原稿を残していきたいと思って、まず原稿用紙に書いたのですが、ほとんど推敲しないので、あまり私の原稿が残っても面白くはないなって、最近思い始めて。


『隣人のいない部屋』本体
収録詩「離水」の自筆原稿が装幀に使われている。

暁方　三角さんは、書く時にいきなり原稿用紙ですか？　メモをとってから書かれますか？

三角　まずノートに、横書きでメモを断片的に。ミセイさんは？

暁方　私もそうですね。ただ、基本的に作品はパソコンに打ち込んで、それを残しておくので、打ち込む過程でかなり文字が行き来します。それで、一発で文字を原稿に書くことはないのですけど。結構一発ですか？　決まったら。

三角　決まったら一発のほうが多いです。手書きって、重要ですよね。それを活字にした時に、全く違うものに見える。やっぱり手で書いていこうって、思っています。

暁方　なるほど。私は中学生ぐらいから、文字を書くということをパソコンですることが多かったんですよ。文字が出てくるスピードも、書くよりも打つほうが早かったりして。それに、文字って自分の人格が現れているような気がして、それを引き受けながら書くことが、ちょっと苦しかったのです。それで、私は最初、肉筆を断固拒否していたんですね。今でもたぶん肉筆で原稿をくださいって言われたら、うろたえるような気がします。三角さんは最初から肉筆ですか？

三角　私は、「現代詩手帖」という雑誌に詩の投稿をしていた時は、まずパソコンを持っていなかったので。だから今、中学生の時にインターネットが、というのを聞いてびっくりしたのですけれど。パソコンがなくて、投稿時代は原稿用紙だったのです。その気持ちに立ち帰ろうっていうのもあり、原稿用紙を使うようになっている部分もあります。

暁方　パソコンだとスピードに乗って書くみたいなところがありますよね。私はそうならないようにしようと思いながら書いているのですけど……。最近、若い詩人が散文調で長く書くのは、たぶんパソコンで打つからかな？　パソコンの打つスピードって、ああいう作品になって出てくることが多くなるのかなあという気がしていて。三角さんって、短い詩行で、一文字ずつ、重さをトントントンと置きながら書いているようなイメージがあるので、それをちゃんと手で書いているというのは、すごく納得します。

三角　そうなのですかね。外出してメモが取れない時に、携帯電話に断片をメモとし

て急いで入れるということはありますけど。

暁方　私は手で書くということをようやく始めたところです。自分の体から出てきたものを、体の先でそのまま書くことって、やっぱり意味があるなと思って。三角さんがずっと肉筆で書いてきたっていうのは、面白いなあと思います。

―記憶について

三角　ミセイさんが物事を記憶する時は、どういう記憶の方法ですか？

暁方　画像とか映像的に覚えていることが多いかもしれません。どの程度みんなに共通していることなのかわかりませんが、記憶の中で看板が読めたりします。例えば「喫茶ぼなーる」っていうのも、たぶん「ぼなーる」という音とか意味とかではなくて、看板の文字を画像のように覚えていて、それで思い返した時に、〝あ、「喫茶ぼなーる」って書いてあった〟みたいな感じ。

三角　看板の文字が読めるって不思議ですね。私はその感覚は全くないです。

暁方　どうやって覚えてます？　文字を読んで、それを記憶で覚えていますか？

三角　私は記憶の方法が、1回おいたようになっていると気づいて。その方法は、例えば母に電話して、昨日、湯田温泉の喫茶店でミセイさんとトークショーして、ステンドグラスがあって、こうだったよって、母に報告をして、母が、ああそうだったんだねっていうふうに、誰かに伝える方法じゃないと思い出せないことに何年か前に気づいて。記憶の中でようやく再現する。

暁方　じゃあ、記憶している間に、話す方法で文章がもうできているんですか？　伝えるための記憶、表出の仕方？

三角　そういう意識を特にしているわけではないのですけれど、誰かに伝えることじゃないと思い出せない……ということが、やだなあって思ってた。

暁方　不思議ですね。でもそれっていいことなんじゃないですか？　だって、そういう記憶の方法だから、そのように詩も書かれているのですよね、きっと。

三角　そうだと思います。

暁方　三角さんの詩は難解だ、と言う人がいるかもしれませんけど、例えば言葉の語彙とか捉え方とか、そういうところでの難解さが多少あったとしても、文章の構造とか、表現の仕方としては、決して難解ではなくて、受け取りやすいものだと思っています。それが、人に伝えるための言語として元々言語を使っているからだというところが、納得ですね。

三角　記憶の方法については、今後、いろんな物を書く人や、物をつくる人に聞いていこう思うのです。

暁方　ああ、面白い。人ありきっていうのはすごく感じるんですよ、三角さんの作品から。いつも、読み手に宛てて、読み手も自分と同じ一人の人間だっていう信頼の上で、言葉を相手に伝わるように、届けるように書いているなあ、というのを強く感じます。それって、今の若い書き手の中で実はとても稀有な存在だと思います。結構みんな、私もですけど、突っ走っちゃうと思うので。

私が人に伝えられるように書きたいと思うようになったのは、三角さんの作品を読んで、やっぱりこういうところがないといけないと思ったからなので、すごく納得です、今の話は。

―中也と付き合う？

暁方　一昨日のトークセッションに来ていただいた方はご存じだと思いますが、三角さんへの質問で、中也賞を受賞してから中也の作品に接して、今、中也をどういうふうに思いますか？　と尋ねられた時に、三角さんが「ダメな恋人みたい」っておっしゃったんですよ。どんどん好きになっちゃう、みたいなことをおっしゃっていたのが、とても印象に残っていて。もしも、中也が今いたら、好きになりますか？　中也と付き合いますか（笑）？

三角　よくそういう話出るのですよ。中也がいたら友達になれるか、なれないかっていう。よく言ってませんか？

暁方　言ってますね（笑）。

三角　で、大体が、ちょっと遠くから見たい、友達にはなれないっていう意見が多いじゃないですか？　もちろん中也に会ったことはないのですが、あんな気まぐれそうな人はちょっと……。気分屋そうだし嫌だなって思っていたのですけど、いや、今いても惚れるかもね、って。

暁方　ほんとですか（笑）？

三角　思いません？

暁方　すごく詩はいいじゃないですか、でも人間関係がダメで、お酒飲んで暴れて。で、最後、一人でシュンとしていたら、あれ、ってちょっと思っちゃうかもしれないな。詩はいいし、みたいな。ウフフフ。

三角　ふーん。

暁方　そういうことじゃなくて、ですか？

三角　……ダメな人が好きみたいで、私は。恋愛の話になって申し訳ないですけど。

暁方　中也のダメなところ（笑）。

三角　ダメそうなので。でももしかしたら、実際はダメじゃなかったかもしれないですもんね？

ーここで話題は会場からの質問タイムに。

小・中学校の教科書の中で、好きだった小説、詩があったら教えて下さい。

暁方　「つり橋わたれ」（作・長崎源之助）。あれが私、なぜかすごく好きだったんですよね。つり橋が怖くて渡れない「トッコ」っていう名前の女の子が、紺がすりの服を着た「風の又三郎」みたいな男の子と一緒にがんばって橋を渡る話……。小学校の低学年ぐらいだったと思うのですけど。三角さんは？

三角　私は高見順の「われは草なり」という詩を、父と言葉遊びでしていまして。

暁方　渋い！

三角　父が、「われは草なり」って言ったら、私が「高見順」って言わないといけないのですよ。

暁方　アハハ。（会場笑）

三角　最近まで完全なる記憶違いで、「われは草なり」「高見順」「われは草なり」「伸びんとす」「どんどんどんどん」「伸びんとす」って、これ最近調べたら、間違っていて［*2］。そんなうちの父の口癖は、「あんたいつ高見順賞取るの？」っていうのと、「あんたいつ芥川賞取るの？」っていう、ちょっと勘違いした質問。

暁方　芥川賞、つらいですね（笑）。

三角　芥川賞はね、違う話なのだけど、お父さん大丈夫かなあって、いつも思います。

行き詰まった時、どうしますか？　どうやって切り抜けますか？

暁方　歩きます。とりあえず。もうそうなったら脳みそもたぶん回ってないので、真夜中の2時だろうが3時だろうが、外に出て、30分から1時間ぐらい歩いて、帰ってくると、どうにかなる……かな？

三角　私は寝るか、行き詰まったことに気づかないふりをして、そのまま進む。

暁方　強いですね！

三角　会社員をやったことがないのですけど、きっと会社に行きたくないな、という日も行かないといけないわけじゃないですか。そういう気持ちで。行き詰まったけど、とにかく進むしかない。悩みがあっても、じゃあそれを解消するしかない。

暁方　なるほど、もうそのまま、なんだろうが行く、みたいな。さすが、かっこいいですね！　男気がありますね。

三角　男気がありますかねぇ。

質問は尽きませんが、トークは終了。終わりに暁方さんから三角さんへ、萩原朔太郎賞のお祝いにと、ケーキのサプライズプレゼントがありました。

＊1　平成26年9月13日に開催された中原中也の会大会でのトークセッション「中原中也と現在――わたしたちが語る中也」。出演は渡辺玄英、三角みづ紀、暁方ミセイ。

＊2　正しくは〈われは草なり／伸びんとす／伸びられるとき／伸びんとす／伸びられぬ日は／伸びぬなり／伸びられる日は／伸びるなり〉（第1連）。

三角みづ紀　（みすみ・みづき）

1981年鹿児島市生まれ。東京造形大学在学中に第42回現代詩手帖賞、第10回中原中也賞を受賞。第2詩集『カナシヤル』にて南日本文学賞と歴程新鋭賞を受賞。執筆の他、朗読活動も精力的に行い、自身のユニットのCDを2枚発表しスロベニア国際詩祭やリトアニア国際詩祭に招致される。第5詩集『隣人のいない部屋』にて第22回萩原朔太郎賞を史上最年少受賞。美術館での展示や作詞など、あらゆる表現を現代詩として発信している。

暁方ミセイ　（あけがた・みせい）

1988年、神奈川県横浜市生まれ。2010年に第48回現代詩手帖賞を受賞した後、2012年、第1詩集『ウイルスちゃん』で第17回中原中也賞受賞。2013年には処女小説「青い花」を『文藝』に発表。現在、雑誌や新聞等で詩やエッセイの執筆の他、左右社ウェブサイトで連詩「地形と気象」の連載も行なっている。近著に『ブルーサンダー』（思潮社）、kindle版詩集『宇宙船とベイビー』（マイナビ）。

中也賞に寄せて

これから愛します、中也のように

text=Mizuki MISUMI
三角みづ紀

今年で中原中也賞は第二十回。わたしが賞をいただいたのは第十回ですから、もう十年も経ったと愕然とします。受賞してからの最たる変化は、中原中也という存在への愛が深くなったことでしょうか。お恥ずかしながら現代詩をろくすっぽ読まず詩の投稿をはじめて、そのまま生きる日々に直結していたものだから無我夢中で書き、現代詩手帖賞をいただき、同年に第一詩集を上梓して中原中也賞へ応募したのでした。

昨年の八月、萩原朔太郎賞の最終選考に第五詩集が残ったと前橋市から速達で知らされ、まず考えたのは「中也賞の時はどういう気持ちで選考会の日を過ごしたのであろうか」というものでした。十年前、まともに人と目を合わせることもできず、贈呈式の挨拶もありがとうございましたとしか発さなかったので、当時の微細な心の動きが思いだせなかったのです。中也賞と朔太郎賞の共通する部分は、事前に候補に残ったと連絡があり選考会の日時も伝えられて、受賞者にのみ電話連絡があるということ。突然の知らせではなく、緊張しながらその日を待つ。

九月一日、雨の夏の日。前橋市から電話を待ち続けるさなかで、人の根っこはさほど変わるものではないから中也賞の時も同じく背を丸めてひたすらに緊張しながら待ち続けていたと確信した。おかしなことに自信があるわけでは全くないのですが、十年前も昨年も連絡を待ち続けた、ということ。一瞬でも受賞しないということを考えなかった。それは、わたしの弱さです。考えたことはそうなってしまうと芯から信じているので連絡はくるとかたくなに待っていた。こわかった。

世界を取り戻すために詩の投稿を決心し、奄美の図書館で近代詩集を片っ端から借りてきて、室生犀星、尾形亀之助、高村光太郎、手当たり次第に読みふけって、しかしこれほどまでに中也を愛することになったのは十年という年月もありましょう。ゆっくりと訪れてきた恋人。わたしはどれだけ中原中也という名に救われたか。二十歳の自分には読みほどけなかった幾つかの詩篇すら今では暗唱できるほどで、その肉筆も親しい。賞をいただき、萩原朔太郎への想いを問われますが「これから愛します、中也のように」とこたえています。だってそうでしょう。恋人となる詩人とはゆっくり丁寧につきあわなければ。焦ってはなりません。

十年十年と執拗に書いてしまいましたが何十年も続くべきことであるので、わたしたち受賞詩人がその名に恥じぬよう書き続けなけりゃあと切に感じるのです。

中也賞に寄せて

暗中の光

text=Misei AKEGATA
暁方ミセイ

詩を書いて最初に頂いた賞は「現代詩手帖」が主催している新人投稿欄の年間賞でした。気づけば十年に近い年月詩を書いていましたが、それまで誰一人として周りに仲間と呼べる人はいなかったので、ようやく詩人たちのいる世界への隠されていた扉が開き、興奮するような恐ろしいような気がして一晩中眠れず震えていました。二年後に、中原中也賞を頂きました。その時は、もっと素直に「嬉しい」と口にすることができたことを覚えています。

詩を書くことは、畢竟、自己満足と言ってしまえば確かにその通りなのかもしれないけれど、良い詩を書きたいと願う限りは、足もとの見えない真っ暗闇の中を方向が合っているのかわからないまま進んでいるようなものだと思います。辿りつかなくてはならない場所があるのに、その場所がどちらの方向なのかもわからず、そもそも、このフィールドに、その場所が存在しているのかもわからないような気持ち。そのうちに、自分が歩いているのかもわからなくなってきて。

その暗闇に、突然強い光が降ってきて、憧れの大先生たちが夢の中のように華やかな宴会場で笑顔を並べて「きみの進路はあっている！そのまま進みなさい！」と励ましてくれ、賑やかに笑い声をあげて、瞬く間に去っていき、気づくと自分はまた暗闇に戻っているのが、新人賞の受賞だと思います。ただ呆然と「ありがとうございます」を言うのが精一杯。でも、その暗闇に慣れ、自分を信じて歩いていくために、わたしにとって中原中也賞は大きな支えになりました。

もちろん、賞を頂くことは運のような部分があるし、受賞にいたらなかった詩集の中には、むしろ優れすぎているように感じるものもあるけれど。自分の書く物を自分では信じていても、それが誰かにとっても少しは意味があり発表する意義があるとはなかなか信じることのできないわたしのような臆病な書き手にとって、賞を頂くことは、この世界に向かって書いていく勇気になります。

贈呈式のために、がちがちに緊張して山口へ向かった二十三歳の自分の、新幹線の中で抱いていた決意。「信じるものを書いていこう」。いつまでも忘れずに記憶して、今でも新幹線の窓を睨むように見ている気がする、彼女に恥じないよう、これからも書いていきたいと思います。

◎特別寄稿 | Special contribution 2015 |

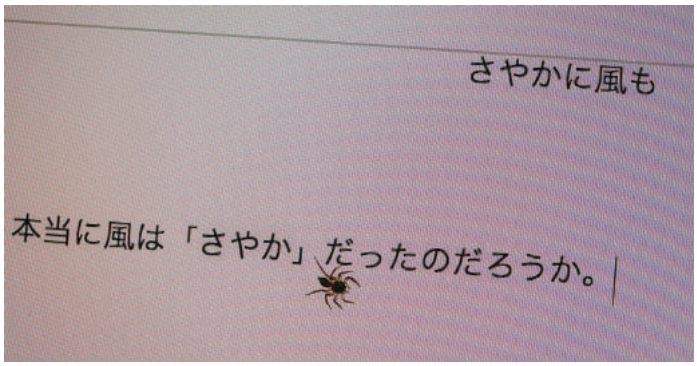
写真展「さやかに風も」に寄せて

text & photo=Nobuo SHIMOSE
下瀬信雄

本当に風は「さやか」だったのだろうか。そう、中也以前と以後では近代詩が大きく変わってしまった。

日本古来の和歌や俳句などに代表されるたおやかで簡潔な短詩系表現や、韻を大事にするかっちりとした漢詩などとは全く違ったそれをダダイズム系とでも言ったら良いのだろうか。明治期に口語体の流麗な詩を模索した先人たちの努力はなんだったのだろう。

詩の歴史などには疎い私ならずとも、多くの人は翻弄され、行き場のない言葉の先の不安を感じる。詩はタイトロープを渡る言葉だ。踏み外しそうな見せ場を作りなが



ディスプレーの上のハエトリグモ

ら、かろうじて向こうに渡りきるのを常とする。

でも中也の詩は空中ブランコ、空中に投げ出された言葉はクルクル回り、別の誰かに不意に受け止められる。主役が入れ替わる。見ている人は一瞬迷う。

クダをまく中也に腹を立て、柔道の技で投げ飛ばした檀一雄ならずとも、私だって殴ってやりたい心情にかられるのだ。

レースを纏ったビル（東京・二子玉川）

だから私は立原道造の方が好きだった。美しい夢のような抒情詩で浅間山の麓の村の一夜を描いた『萱草（わすれぐさ）に寄す』を愛唱していた。

ちなみに中也の没後創設された第一回中原中也賞（現在の賞とは異なる）は立原道造であった。

建築家でもあった道造の詩は、端的で構成もしっかりしていて破綻もなく美しい。瀟洒（しょうしゃ）な大正モダニズムの建築がそこにスッと建っているようだ。

『萱草に寄す』の「のちのおもひに」の冒頭は

夢はいつもかへつて行つた

そう、いつも詩人の中にある青春の思い出、帰っていく場所。でもそれはいつも夢のような一夜ではなかったのかもしれない。そう感じたのは、中也への思いを語る時の道造の「反発と離別」で、とても「端正」とは言い難い複雑なものを感じたからだ。道造も又、中也の孤高の嘆きに心乱された一人の若者だったのだろう。

そして私の中の帰っていく場所があるとすれば、それは「北の海」であり「冬の長門峡」だったような気がする。

中也の詩碑「帰郷」が高田公園（現・井上公園）に建ったのは、私が高校三年生の時だった。新聞記事でその除幕式のことを知って矢もたてもたまらず、という感じで見に行った。

『山羊の歌』と『在りし日の歌』は文学青年たちのバイブルでもあったのだ。中也は伝説の詩人であり、それを取り巻く日本の知の巨人たちはその伝説を今に伝える使徒であり、語り部であり、かつ未だ存命であったことが私を不思議な感情にさせた。決して遠い歴史上の人物ではないのだ。

新聞記事の一週間後の日曜日だったと思う。バイクで萩から山口まで飛ばした。多くはまだ砂利道で轍（わだち）の跡に車輪を取られながらの山越えだった。

ひと気のない高田公園で写真を撮り、碑文を読んだ。

これが私の古里だ
さやかに風も吹いてゐる
あゝおまへは何をして来たのだと
吹き来る風が私にいふ

（碑文形）

もちろん、と私は思った。「碑文」であるから象徴化は止むを得ず、というかむしろ当然で、エッセンスだけが一人歩きをすることは避けられないことは薄々気付いていたので高校生ながら「やっぱりそうなのか」と妙に達観していたのかもしれない。

足湯で温める大根足（山口市湯田温泉）

待っているドア（山口市湯田温泉）

詩碑には書かれなかった段落を下げた二行「心置なく泣かれよと／年増婦の低い声もする」は、いつも私の心に引っかかったままだった。

山口県は明治維新以後、立身出世願望が強い土地柄だ。

「男児志を立てて郷関を出づ、学若し成る無くんば復還らず、……」

同じ山口県の先人、僧・月性の詩などは特に有名で、神童と呼ばれた中也が知らないはずはなく。多分その立身出世を願う郷土の人たちの期待と自分の挫折は、「帰郷」に微妙な影を落としている。

もっとも、後年になって分かったことだが、この詩は複雑な変遷をたどって今の形に落ち着いたらしい。そのことはまた詳しく書きたいとも思っている。

詩碑が建って二年後、写真学校を終えて萩で写真館を継いだ私は進むべき道を見失っていた。それでもなお決して悲観的ではない茫洋とした希望があったのは中也の詩に接していたからのような気がする。詩でうたわれることは個人的なことだ。大説ではなく小説、世界ではなく此処のことがテーマだ。そのことは又、全世界の人の共通の苦悩であり喜びでもある。

多分写真も同じはずだ。写真は目の前の現実しか写せない。片田舎のことだからさして特別な出来事やドラマがあるはずもなく、人から見れば単調な日常だ。決定的瞬間なんて滅多に出会うはずもなく、「名作のような画面」に遭遇することはまずない。

でも中也の詩は、普通の日常の中に突然のように不協和音が入り込み、風景が変質し、人の心を乱すのを常としている。もちろん私に理解力が不足しているからなのだろうが、端正な詩が好きな身としてはいつも引っかかっていたのだ。

写真も同じように普通の日常風景だ。それでも画面にはしばしば思いがけない不協和音が入り込む。でも、その思い通りにい

暮れる街角（山口市湯田温泉）

かない現実の方がはるかに強力で興味深いのかもしれない。不協和音と思えたものが実は現実を照射する光なのだ。

そして中也の言葉は引っかかりながらも流れ、難解だ嫌いだなど思いながら心を捉えて離さない。周到な準備がされた仕掛けだなどと論じる人も多いが、本当は止むに止まれぬ逸脱だったのではないだろうか。

「帰郷」はいつも私が帰っていく場所になった。風はいつもさやかとは言い難かった。

そして深い悲しみの中、冬の長門峡の料亭で一人酒を酌む中也の詩は、何がうたわれることもなく、水が流れ、夕日が沈む。技巧などはさして感じられない。でも一度聞いたら忘れられない音律でいつまでも心に残る。

中也の到達点だったのかもしれない。いつの日か私の写真も「なんかそうありたい。」と思った。

私は三十五ミリ小型カメラを使って、萩の町並みや家族のごく個人的な身の回りのスナップを撮り始めた。

初出は一九八九年。詩碑が建ってからすでに二十年以上経っていた。銀座、新宿、大阪ニコンサロンでの個展と雑誌「日本カメラ」での掲載は回を重ね、計四回を数えた。

そのタイトル「風の中の日々」は、中也の詩碑なくては生まれなかったのかもしれない、と思うのだ。

軽やかな飛翔（宇部市ときわ公園）

下瀬信雄 （しもせ・のぶお）

1944年、旧満州国(現中国東北部)新京市生まれ。1歳の時、山口県萩市に引き揚げる。萩市立明倫小学校、明経中学校を経て山口県立萩高等学校を卒業。1967年、東京綜合写真専門学校を卒業後、地元萩で作家活動を始める。1990年、写真集『萩・HAGI』により日本写真協会賞・新人賞を受賞。2005年には「結界」シリーズの写真展を評価され、伊奈信男賞を受賞した。作品はアメリカのプリンストン大学、山口県立美術館、山口小郡文化資料館、ニコンサロン・フォトカルチャー支援室などにコレクションされている。

企画展Ⅱ

コラボレーション企画

下瀬信雄写真展「さやかに風も」

平成27年
1月28日(水)
―4月12日(日)

当館では数年に一度、文学以外のジャンルのアーティストが、中也の詩の世界とのコラボレーションによって生みだした作品を展示する企画展を行っています。

今回は、中原中也記念館開館20周年を記念したコラボレーション企画の第二弾として、山口県萩市在住の写真家・下瀬信雄氏による写真展を開催しました。

「風の中の日々」や「結界」シリーズなど、郷土の風土や暮らしに目を向けた独特の作風で知られる下瀬氏。井上公園の詩碑にも刻まれている、中也の詩「帰郷」の一節「これが私の故里(ふるさと)だ／さやかに風も吹いてゐる」から写真展のタイトルをとり、ご自身の中也への思いを繊細な写真の世界で表現されました。

本展では、写真作品36点（タペストリー含む）のほか、写真集や取材で使用されるカメラなど全111点を展示しました。

写真は、萩市内の風景が中心で、湯田温泉や東京で撮影されたものも含まれています。そのほとんどがモノクロで、「希望が走ってくる」「チェスの駒にも意思はあるのか」など、タイトルにもいろいろな意味がこめられているように感じられます。

写真作品が並ぶ展示室は、いつもと違った雰囲気で、写真愛好家の方々も多数来館され、下瀬氏の写真の世界を通して、中也の存在を感じていただきました。

平成26年7月31日(木)―9月28日(日)

昭和初期に活躍し、日本の詩史に大きな足跡を残した詩人・中原中也。中也の作品は、没後80年近くたった今でも多くの人に愛されています。中也は、先行する詩人からどのような影響を受け、また、後世の詩人にどのような影響を与えたのでしょうか。

開館20周年を記念した本展では、日本の近現代詩が積み重ねてきた歴史をひもときながら、中也の詩の独自性と魅力について紹介しました。

1　中也の代表作を説き明かす

中原中也の代表作「サーカス」と「汚れつちまつた悲しみに……」の特徴と詩史との関わりについて、「オノマトペ」や「リフレイン」などの項目を立てて紹介しました。

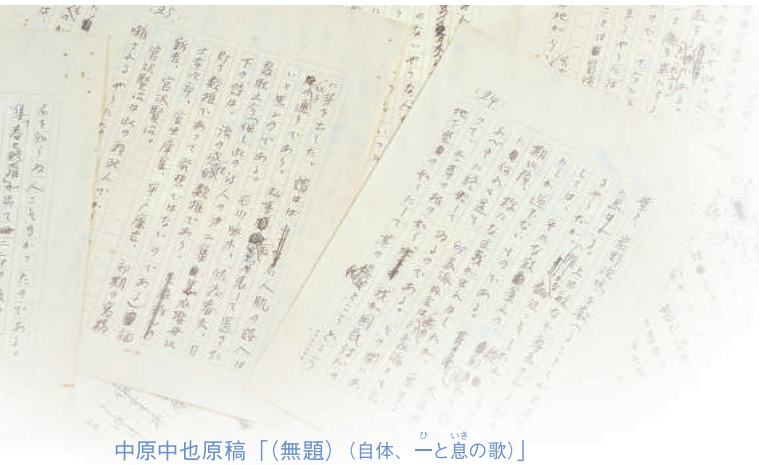
2　中也へ至る詩の流れ
―明治・大正の詩

日本の近代詩は、明治10年代の新体詩に始まり、明治30年代から大正にかけて、その主流が文語定型詩から口語自由詩へと移り変わっていきました。中也は、10代前半から短歌をつくりはじめ、その後様々な詩人の影響を受けながら、自らの詩を模索していきます。中也が関心を抱いた詩人には、北原白秋、佐藤春夫、萩原朔太郎ら、詩史的に高く評価されてきた詩人たちもいますが、三富朽葉（みとみくちは）、岩野泡鳴（いわのほうめい）ら、現代ではあまり読まれなくなった詩人もいます。ここでは明治から大正にかけての詩の流れを中也独特の視点を交えて紹介しました。

《主な展示資料》中原中也原稿「（宵に寝て、秋の夜中に目が覚めて）」、原稿「（無題）（自体、一と息の歌）」、岩野泡鳴原稿「史詩堕落仙人」、萩原朔太郎原稿「恋を恋する人」「愛憐」、佐藤春夫原稿「秋衣の歌」、『三富朽葉全集』、「白梅歌会詠草」、「白痴群」第6号

3　同じ時代を生きた詩人たち

中也は高橋新吉『ダダイスト新吉の詩』の影響下で詩作を開始し、富永太郎との交友の中でフランス象徴派の詩人たちを知ります。また、宮沢賢治『春と修羅』をいち早く評価し、友人たちに彼の詩を勧めました。ここでは、大正末から昭和10年代に活動した詩人の中で、中也が影響を受け、交友のあった詩人との関連とともに、中也に対する批判も併せて紹介し、同時代における詩人・中原中也の位置を探りました。



中原中也原稿「（無題）（自体、一と息の歌）」

《主な展示資料》中原中也原稿「（形式整美のかの夢や）」、創作ノート「ノート1924」、日記「日記（雑記帖）」、宮沢賢治使用手帳、宮沢賢治原稿「春と修羅」「銀河鉄道の夜」（精密複製）、草野心平原稿「生殖Ⅰ」「冬眠」「ぐりまの死」

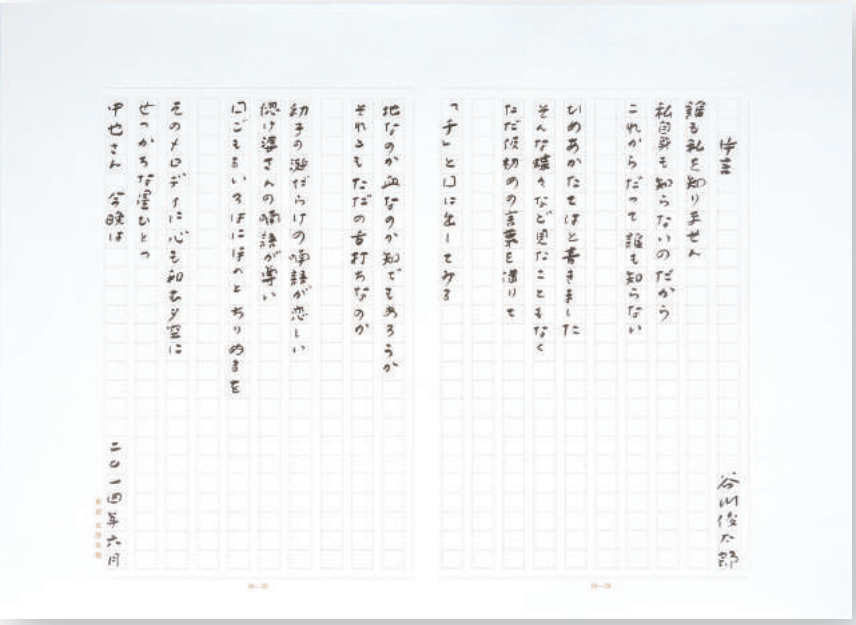
4　現代詩の中の中也

中也の詩が広く読まれるようになるのは戦後です。中也の詩に強い影響を受けた詩人や、中也を本格的に論じる詩人が現れます。ここでは、主に昭和20年代以降に中也論を発表した詩人、作品に中也の影響が見られる詩人たちの紹介を通じ、現代詩における中也の評価や影響を紹介しました。

《主な展示資料》谷川俊太郎原稿「片言」（新作）、伊藤比呂美原稿「とげ抜き　新巣鴨地蔵縁起」、四元康祐原稿「パリの中原」

なお、本展は、独立行政法人日本芸術文化振興会の「芸術文化振興基金助成事業」に採択され、展示資料等の充実を図ることができました。

また、本展に中也の詩業と生涯を追加し、平成26年10月9日(木)から11月5日(水)までを会期に、国文学研究資料館（東京都立川市）において協同展を開催しました。



谷川俊太郎原稿「片言」

企画展Ⅰ

中原中也記念館の20年

平成26年
2月16日（日）
―7月27日（日）

平成26年に開館20周年を迎えた中原中也記念館。平成6年2月18日、中也生誕の地である山口市湯田温泉に開館してから今日まで、中也自筆原稿などの資料収集・保存や、さまざまなテーマの企画展、教育普及等の活動を通じ、中也の業績を広く伝えてきました。

開館20周年を記念して開催した本展では、20年の歩みをたどりながら、主な収蔵資料や建築関連資料、ゆかりの方々からのメッセージなどの展示により、記念館の魅力を紹介しました。

1　中原中也記念館ができるまで

中原中也の生家は、中也の養祖父・政熊（まくま）が開業し、父・謙助（けんすけ）が継いだ中原医院でした。昭和47年、生家は火災により茶室と蔵を残してほぼ焼失しますが、現在、中原中也記念館が建っているのは、その跡地です。

中也は没後に評価が高まり、顕彰活動が山口でも行われるようになりました。なかでも、中也没後50年の前年である昭和61年に開催された「中原中也特別展」（山口市歴史民俗資料館）では、中也の自筆原稿などの資料が初公開され、大きな反響を呼びました。この特別展示が主な契機となり、中原中也記念館を建設しようという動きが高まります。

展示1では、中也生誕の地と、記念館開館までの歴史を紹介しました。

2　20年のあゆみ

平成6年2月18日、中原中也記念館が開館します。10年目には大きなリニューアルも加えられ、年数回の企画展やイベントの開催により、中也をさまざまな角度から紹介してきました。

展示2では、記念館の20年の年譜、公共建築百選に選ばれた宮崎浩氏による建築や、過去の企画展を紹介しました。

3　中原中也記念館コレクション

中原中也記念館は中也の自筆原稿や関連書籍などの資料を収集・保存し、現在は直筆資料約380点、書籍なども合わせると約1万5千点の資料を収蔵しています。開館以来、中也の自筆原稿や書簡などの資料を多くの方々からご寄贈いただき、収蔵資料をより充実させることができました。

展示3では、記念館が誇る貴重なコレクションから50点の原資料を、5つのテーマ（『山羊の歌』／『在りし日の歌』／日記・遺品／書簡／翻訳詩）に会期を分けて展示しました。

4　未来へ向けて

中原中也記念館は、今日まで多くの方々のご支援をいただき、20周年の節目を迎えることができました。中也の遺した貴重な資料と作品を未来へと伝えることは、記念館の大きな使命の一つです。

展示4では、記念館や中也とゆかりの深い詩人・作家の方からいただいたメッセージや、20周年を記念して開催される事業を紹介しました。

《主な展示資料》井上公園詩碑建立関連資料、中原中也記念館建築模型・コンペ公募図面（プランツアソシエイツ制作）、中也18歳肖像写真、原稿「朝の歌」「冬の長門峡」「四行詩（おまへはもう）」、翻訳詩原稿「感動」「わが放浪」、創作ノート「ノート1924」「ノート小年時」、日記「新文芸日記」「日記（雑記帖）」、直筆メッセージ原稿（川上末映子、北川透、佐々木幹郎、中村稔、福島泰樹、町田康　※50音順・敬称略）

企画展Ⅱ

YCAMコラボレーション企画

中原中也 歩みのリズム

――〈僕は街なぞ歩いてゐました〉

平成26年
10月1日（水）
―平成27年
1月25日（日）

中原中也記念館開館20周年記念事業の一環として、山口情報芸術センター（YCAM）とのコラボレーション展示を開催しました。

中也は、昼に起床し、深夜まで街中を歩き続け、帰宅したのち本を読んだり、詩を書いたりしていました。中也は日々の生活の中で「歩く」ことを重視し、作品や書簡の中でも多数言及しています。本展では、中也の生活において特徴的であった「歩み」と、歩き続ける生活の中で宿った詩の「リズム」をテーマに、来館者が詩と身体の両方に向き合いながら、中也の詩の魅力を発見できるような体験型の展示を行いました。

展示1 "リズム"
――歩き続けた詩人、そして身体

前庭には「歩み」がテーマになった中也の作品を展示したほか、「春の消息」の詩句を文字パネルにし、前庭、読書コーナー、2階へ続く階段などにワイヤーで吊るし、歩きながら作品が読めるインスタレーション（空間展示）を設置しました。

ルーフガーデンでは、中也の詩の「リズム」をテーマに、山口市に住む方々による中也の詩の朗読を流し、それを聴きながら、来館者も詩の朗読を楽しめるような展示を行いました。また、ルーフガーデン内にハンモックや丸太の椅子を設置し、座ったり寝転んだりしながら中也の詩集が読めるようにしました。

展示2 "歩み"
――中原中也 feat. 今

2階企画展示室では、中也の「歩み」に焦点を当てたサウンドインスタレーション（音響などを用いて空間を構成する展示）を設置。展示室内に暗室を作り、そこで平成24年に山口情報芸術センターで行ったワークショップ「walking around surround」の音声を再構成した音響作品を展示しました。暗転したスペースで、自分の身体をイメージしながら、中也の「歩み」について、思いをはせていただきました。

特別企画「中原中也 feat. 現代のミュージシャン」
（平成26年11月26日～平成27年1月25日）

YCAMのディレクション、株式会社東京ピストルの協力により、現代のミュージシャンが中也の詩をもとに制作したオリジナル曲の展示を行いました。参加したアーティストは、降神（おりがみ）、高木完×高橋源一郎、タカツキタツキ＆SWING-O、GOMESS、山口活性学園、Vampillia、worlds end girlfriend＆BOOL、和田昌昭の8組です。制作された楽曲は、映像や絵画とともに、2階企画展示室にて公開しました。

祈りをテーマとした中也の詩は、心の奥深いところに響く魅力があります。崇高な何ものかに対し、心の弱さを打ち明け、今あることに感謝し、志を述べる……。その言葉は真っ直ぐに私たちの胸まで届き、特定の宗教の枠に留まらない普遍的な祈りの心を呼び覚ます。本展では、中也の祈りの詩を、《うやまう》《もとめる》《いつくしむ》《こころざす》という4つの主題に分類し、直筆原稿や日記、詩の初出雑誌や収録詩集などの資料とともに紹介しました。

1 うやまう

―展示詩「秋の日」
「夏は青い空に……」
「我が祈り」

俗世間の人々に失望し、孤独を味わうとき、中也の視線は人知を超えた崇高な存在へと向かいます。作品の中で中也は、飾りのないありのままの自分をさらけ出して敬虔な心を神に示し、より高い境地に導かれることを目指します。

このコーナーでは、神をうやまう詩を3篇紹介しました。そのうちの1篇「秋の日」は、中也の創作ノート「ノート1924」の一度使用したページの空白部分に書き込まれた詩です。本展では、ノート（レプリカ）を展示し、詩の原稿がどのような形で書かれているのかも見られるようにしました。

2 ― もとめる

―展示詩「冷酷の歌」「悲しい歌」「聞こえぬ悲鳴」

人との関わりの中で生じる誤解や不信に傷つき、疎外感に苛まれ、自らの弱さ、愚かさに打ちひしがれたとき、中也は神に悲しみや苦しみを訴え、救いをもとめます。その言葉は真っ直ぐで、心の奥に直に触れられたような感覚を読者に与えます。

このコーナーでは、神をもとめる詩を3篇紹介しました。そのうちの1篇「冷酷の歌」は、全4節、ノート4頁にわたって綴られた中也としては長篇の作品です。本展では、ノートを切り離した形のレプリカを製作し、全篇を中也の直筆で読むことが出来るようにしました。

3 ― いつくしむ

―展示詩「生ひ立ちの歌」「更くる夜」

今ここにあることに無上の喜びを感じ、世界をいつくしむ……。中也の詩にはそのような心情をうたった詩があります。その思いは、世界をそのまま受け入れ、さらには神の恩寵を感じ取ることにもつながっていきます。

このコーナーでは、この世をいつくしむ詩を2篇紹介しました。そのうちの1篇「更くる夜」は、直接的な祈りの言葉が綴られている作品ではありませんが、静かな夜に一人、自分の心のつぶやきを聴くということが、祈りにつながっています。

4 ― こころざす

―展示詩「寒い夜の自我像」「いのちの声」

理想を強く念じ、志を高らかに宣言する一方で、悲しみや苦しみも同じ詩の中にうたわれるのが中也の詩の特徴です。それらが表裏一体となることで、作品に陰影が加わり、私たちの心により強く響きます。

このコーナーでは、理想の生き方をこころざした詩を2篇紹介しました。そのうち「寒い夜の自我像」では、詩集発表形とともに、中也が公表しなかった続きの部分の原稿を展示し、有名な作品の隠された一面にスポットライトを当てました。

特別コーナー

―展示詩「羊の歌」

「羊の歌」は、第1節の副題が「祈り」であり、また、他の3節のそれぞれが、冒頭の祈りの言葉と交差し、全体が祈りという主題の変奏曲のようになっています。

このコーナーでは、原稿（レプリカ）を全て読めるように展示するとともに、詩を贈られた友人・安原喜弘についても紹介しました。

《主な展示資料》中原中也創作ノート「ノート1924」「ノート小年時」、原稿「悲しい歌」「聞こえぬ悲鳴」「羊の歌」、雑誌「白痴群」第6号、安原喜弘編著『中原中也の手紙』

館報第20号記念

寄稿記事・特集総目次

開館2年目となる平成8年3月31日に創刊した「中原中也記念館館報」。本号で第20号を迎えました。これまでご寄稿いただきました記事や特集を紹介し、館報の歴史をダイジェストで振り返ります。

※館報の記事は中原中也記念館ホームページでご覧いただけます（PDFファイル）。

第1号　平成8年　1996

◎その志明らかなれば―館報発刊によせて　……佐藤泰正
◎「末黒野」余聞　……和田　健
◎キイワードは「中也」　……竹花京子
◎聞き語り「中也ゆかりのひとびと」第1回　……三坂幸子

第2号　平成9年　1997

◎舞台公演を「魅せられて中也詩」に決める迄　……加藤燿子
◎聞き語り「中也ゆかりのひとびと」第2回　……白木美枝子

第3号　平成10年　1998

◎碑の前で、それでも　……安原喜秀
◎中也とランボーの脳味噌　……朝比奈誼
◎父のプレゼント　……諸井泰子
◎聞き語り「中也ゆかりのひとびと」第3回　特別編　ラジオ番組「中原中也を偲んで」
※昭和40年6月6日に放送されたKRYラジオの採録。小林秀雄、大岡昇平、中原フク、和田健出演

第4号　平成11年　1999

◎一六四番目に『山羊の歌』を贈られた男　……竹田　巌
◎大空の下の朗読会　……伊藤孝子
◎『末黒野』と吉田緒佐夢　……和田　健

第5号　平成12年　2000

◎中原ならどう読む？　……秋山　駿
◎『小さき芽』と吉田緒佐夢　……和田　健
◎父　阿部六郎の思い出　……小野悠紀子
◎年増婦（としま）の声～中也と私～　……大谷　巌

第6号　平成13年　2001

◎富永太郎の書簡と正岡忠三郎日記
――正岡家資料について　……佐々木幹郎
◎吉田緒佐夢の人間像　……和田　健

第7号　平成14年　2002

◎我家のダダさん　……富永一矢
◎中原中也という経営　……山岡頼弘
◎中也と心平の青春交友　……長谷川由美

第8号　平成15年　2003

◎特集「追悼・伊藤拾郎氏」
◎特別展「中原中也展
～汚れつちまつた悲しみに…」…赤間亜生

第9号　平成16年　2004

◎特集Ⅰ「追悼・中原美枝子氏」
◎特集Ⅱ「記念館リニューアル」

第10号　平成17年　2005

◎ボン・マルシェ日記　修復こぼれ話：秦　博志
◎ちゅうとやーの「中也ソングブック in 鎌倉」
　コンサートレポート　……谷川賢作
◎文学碑除幕式の思い出
　嘉村礒多文学碑を巡って……大平和登

第11号　平成18年　2006

◎貴重な第一次資料・中也遺稿……中村　稔
◎絆のある風景　……荒砂正伸

第12号　平成19年　2007

◎２００７年、チュウちゃんに聴く：長谷部奈美江
◎生誕百年を迎えて　……西村正伸
◎詩集の記憶　……水無田気流
※企画展「第11回中原中也賞」のための書き下ろし

第13号　平成20年　2008

◎特集「生誕百年をふりかえって」

第14号　平成21年　2009

◎中也と高森と四季　……杉山平一
◎中原中也の〈問い〉の深さ
　―出会いから今日まで　……北川　透
◎特別企画展「『歴程』と中原中也」
　―カエルの詩が生まれる情景―：田原義寛
◎中原呉郎先生のこと　……成田　稔

第15号　平成22年　2010

◎松本隆インタビュー
◎lyrical murderer／一枚絵に寄せて：浅田弘幸
◎死と哀悼―公開講演要旨　……栗原　敦

第16号　平成23年　2011

◎美しい敗者　……中島義道
◎歩く寒い空の詩人
　――吟遊科学者がみた中原中也：長沼　毅
◎金沢の中也のこと二三　……松田章一

第17号　平成24年　2012

◎頑是ない魂―思想家としての中原中也―
　……吉岡　洋
◎中也とその周辺の人々
　～花柳寛寿美さんにきく

第18号　平成25年　2013

◎ダダと「言葉の刻印力」　……諏訪哲史
◎和合亮一トークライブ
　「〝ことば〟を通して福島と向き合う」

第19号　平成26年　2014

◎茶色い戦争と、中也さんと、僕の映画と。
　……大林宣彦
◎中也生活　……三角みづ紀

第20号　平成27年　2015

◎中原中也賞詩人によるブックトーク
　三角みづ紀×暁方ミセイ
◎これから愛します、中也のように：三角みづ紀
◎暗中の光　……暁方ミセイ
◎写真展「さやかに風も」に寄せて：下瀬信雄

News!

●イベント名　●出演者　●会場　●企画・主催（表記のないものは中原中也記念館）

9 SEP　10 OCT　11　1 2015 JAN

10（水）オリジナル詩集『中也の詩』（販売用）発行

14（日）特別講演「自分をこじらせた詩人、あるいは青春のむずかしさ」
講師：池澤夏樹（作家・詩人）
ホテル松政

15（月）中原中也賞詩人によるブックトーク
出演：三角みづ紀（詩人）、暁方ミセイ（詩人）
喫茶ぽなーる

11（土）―13（月）映画で知る中原中也 第1弾「野のななのか」上映 トークイベント（10/12）
ゲスト：大林宣彦（映画作家）、大林恭子（エグゼクティブ・プロデューサー）
聴き手：中原豊（当館館長）
山口情報芸術センター

17（金）―19（日）映画で知る中原中也 第2弾 中也が観た映画 Part Ⅰ「カリガリ博士」、「モロッコ」、「新しき土」
山口情報芸術センター

19（日）中也忌～墓前祭と中也に捧げる夕べ
経塚墓地、中原中也記念館

24（金）―25（土）映画で知る中原中也 第3弾「眠れ蜜」特別上映＆中也が観た映画 Part Ⅱ「丹下左膳　第1篇」トーク「中也が観た映画」（10/25）
登壇：杉原永純（YCAMシネマ担当）、池田誠（当館学芸員）
山口情報芸術センター

助成事業

4/27-28
朗読劇「中原中也物語」
会場：ニューメディアプラザ山口
主催：幸田弘子の会

9/21、27　10/4、26
Poetry Session
会場：Pelo、RAGTIME、中原中也記念館前庭
主催：平成DADA実行委員会

10/25-11/24
中也と長門峡展
会場：旧洗心館（阿東）
主催：長門峡観光協会

開館20周年ロゴマーク

中原中也記念館 開館20周年

帽子をかぶった中也18歳頃の写真のシルエットと、開館20周年の「20」を組み合わせました。記念館とともに、これから先にも続いていく中也の強いまなざしが印象的に表現されています。このロゴマークは開館20周年を通じ、様々な場面で使用されました。

13（土）―26（日）ポエトリー・フェスティバル in 湯田温泉　――中也にひたる、文学の秋
中也メニュー　湯田温泉10店舗

1（月）―29（水）エフエム山口「愛の詩―いとしい人へのメッセージ―」募集・放送

18（土）―22（水）無料開館

22（水）―25（日）企画展Ⅱ（コラボレーション企画）下瀬信雄写真展「さやかに風も」　4/12（日）まで

28（日）―28（水）1（水）企画展Ⅱ（YCAMコラボレーション企画）「中原中也　歩みのリズム―〈僕は街なぞ歩いてゐました〉」　2/15（日）まで

2014～2015年
2015年4月 学校配布（予定）

リニューアルオープン

建物や設備の老朽化が進行していたこともあり、平成25年11月1日から平成26年2月15日まで休館し、開館20周年に向け、壁面の美装化や空調の更新などの大規模な改修工事を行いました。

装いを新たにした中原中也記念館のリニューアルオープン初日、2月16日には山口市主催による記念式典が開催され、関係者60名のご臨席をいただきました。あわせて、2月末までを入館料無料期間とし、休館日を除く10日間で2千761名の入館者がありました。また、期間中の2月26日には、島根県からお越しいただいた80代の女性が入館60万人目となり、記念品として20周年オリジナルグッズを贈呈。

第11回常設テーマ展示「中也　愛の詩―いとしい者へ」、企画展Ⅰ「中原中也記念館の20年」もリニューアルオープンと同時に会期が始まり、中原中也記念館開館20周年記念事業の幕開けとなりました。

ことばとあそぼう ～子どものための詩作ワークショップ～

5月4～6日　クリエイティブ・スペース赤れんが

ワークショップの講師は、中原中也賞受賞詩人で国語教師でもある和合亮一氏と、ダンサーの唐沢優江（まさえ）氏です。参加者は小学校3年生から5年生までの7名でした。

参加した子どもたちは、机に座って詩を書くだけでなく、外に出かけたり、ダンスを見たりしながら、身体で感じたことを言葉にし

記念館ニュース

中原中也記念館は平成26年2月18日に開館20周年を迎えました。
本号の記念館ニュースでは、開催された主な記念事業をご紹介します。

2 FEB 2014

16 日 開館20周年記念式典
中原中也記念館前庭
山口市

映画で知る中原中也
映画「眠れ蜜」上映&
トークイベント
ゲスト：
佐々木幹郎（詩人）
山口情報芸術センター

公式ガイドブック
『中原中也の世界』発行

オリジナルフレーム切手
「中原中也記念館
20周年記念」発売
日本郵便株式会社中国支社

18 火 開館20年

16 日 — 28 金 無料開館

4 APR

湯田温泉旅館・ホテルへの
オリジナル詩集『中也の詩』設置

29 火 中原中也生誕祭
「空の下の朗読会」
ゲスト：
谷川俊太郎（詩人）、
谷川賢作（作曲家・ピアニスト）
中原中也記念館前庭

トークセッション
「中原中也、
その愛と魅力と謎」
出演：
川上未映子（作家・詩人）、
穂村弘（歌人）
山口市民会館
山口市

5 MAY

4 日 — 6 火
ことばとあそぼう
～子どものための詩作
ワークショップ～
講師：
和合亮一（詩人・国語教師）、
唐沢優江（ダンサー）
クリエイティブ・スペース
赤れんが

7 JUL

13 日 中原中也詩英訳
パネルディスカッション
パネリスト：
伊藤比呂美（詩人）、
ジェフリー・アングルス
（西ミシガン大学准教授）、
アーサー・ビナード
（詩人・俳人・随筆家・翻訳家）、
四元康祐（詩人）
ホテル松政

8 AUG

30 土 「にほんごであそぼ
コンサート in 山口」
公開収録
山口市民会館
NHK山口放送局、
山口市

18 火 開館20周年記念 小型記念通信日付印作成・押印　山口湯田郵便局　日本郵便株式会社

16 日 企画展I「中原中也記念館の20年」 — **27 日**

31 木 特別企画展
「中原中也と日本の詩」

16 日 第11回常設テーマ展示「中也　愛の詩―いとしい者へ」

中学生向け副読本『出会い？ 発見?! 感動!! 中也読本』制作（2013年6月 編集準備会設置、2014年6月 編集委員会設置）

中原中也詩英訳 パネルディスカッション

7月13日　ホテル松政

「中原中也詩英訳パネルディスカッション」は、英訳によって見えてくる詩の特徴や、日本語と英語の詩的表現の違いなどを浮き彫りにすることを目指し、パネリストが共同で中也の詩を英訳するという初めての試みでした。メンバーは、日米両国で活動を続けている詩人の伊藤比呂美（いとうひろみ）氏、日本語と英語双方に造詣が深い詩人・翻訳家のジェフリー・アングルス氏、アーサー・ビナード氏、四元康祐（よつもとやすひろ）氏の4名で、2日間にわたるワークショップを経て、「春の日の夕暮」「骨」「サーカス」を中心に熱い議論が展開されました。満席の来場者から好評をいただき、当日の内容は雑誌「ユリイカ」の平成26年10・11月号に掲載されました。

て詩を創作しました。

最終日は発表会を行い、子どもたちは「やまぐち」と「私」というテーマでつくった詩を朗読しました。ここで発表された子どもたちの作品は、中原中也記念館の読書コーナーで展示しました。

池澤夏樹氏特別講演

9月14日　ホテル松政

開館20周年を記念して、作家・詩人の池澤夏樹氏をお迎えして特別講演を開催しました。池澤氏は「自分をこじらせた詩人、あるいは青春のむずかしさ」と題して、中也の詩を起点に、文学と青春の関係について、詩の朗読やご自身の経験談も交えながらご講演されました。ヨーロッパやアメリカの文学との比較から見えてくる日本文学の特質など、多岐にわたる内容を穏やかな口調で丁寧に話されました。

参加者は180名を越え、「世界の文学の潮流をわかりやすく説明された素晴らしい講演だった」、「中也の世界をより深く感じることができた」といった声が寄せられました。

映画で知る中原中也

10月11～25日　YCAM

「映画で知る中原中也」は、映画というメディアを通して浮かび上がる中也の詩の世界や人物像を紹介する企画で、2月の実施に続き、山口情報芸術センター（YCAM）の協力を得て開催されました。中也の詩をモチーフとした大林宣彦監督の最新作「野のななのか」を幕開けに、中也が観た映画として「カリガリ博士」「モロッコ」「新しき土」「丹下左膳（たんげさぜん）　第1篇」、そして長谷川泰子主演の「眠れ蜜」というラインナップでした。10月12日には、大林監督とエグゼクティブ・プロデューサーの大林恭子氏をお迎えし、中也への思いを重ねながら「野のななのか」他のご自身の作品について語っていただきました。また10月25日には、YCAMシネマ担当と当館学芸員が「丹下左膳　第1篇」上映後に同作品について語り合いました。

ポエトリー・フェスティバル in 湯田温泉

―中也にひたる、文学の秋

9月13日～10月26日

開館20周年を迎えた平成26年は、秋にも中也や詩に関するイベントが数多く開催されました。そこで、大勢の方に知っていただき、興味を持っていただくため、9月13日から10月26日の約1か月間を「ポエトリー・フェスティバルin湯田温泉」と名付けました。

このフェスティバル期間中に行われたのは、中原中也の会大会、池澤夏樹氏の講演会、中原中也賞受賞詩人の三角みづ紀氏と暁方ミセイ氏のトークイベント（1～6頁参照）、中也にまつわる映画の特集上映「映画で知る中原中也」、10月22日の命日を控えて開催された「中也忌～中也に捧げる夕べ」などの多彩なイベントです。

また、湯田温泉界隈の喫茶店などを会場にしたポエトリー・リーディングのライブや、飲食店10店舗が参加した「中也メニュー」など、まちのあちこちで中也に触れることのできる企画もありました。

フェスティバルの最終日には「Poetry Session Final」が開催され、一般参加による朗読会、ミュージシャンや大道芸人のパフォーマンスなどで、にぎやかにフィナーレを飾りました。

開館20周年記念刊行物

開館20周年記念事業には、展示や各種イベントのほかにも、中原中也記念館が発行した書籍がいくつかあります。

公式ガイドブック『中原中也の世界』（A4判・オールカラー96ページ、税込1千2百円）は、「自筆原稿で読む中也の詩」など、所蔵資料を中心に中也の世界を総合的に紹介するもので、2月16日に発行しました。オリジナル詩集『中也の詩（うた）』（変形A5判・オールカラー32ページ、税込1千円）は、様々なテーマに合わせて中也の詩から21篇を選び、背景には屋外展示等で使用したビジュアルを用いて詩のイメージを表現したもので、9月10日に発行しました。

また、中也の生誕地である山口市の子どもたちが、中也の詩に親しむ機会を創出するため、中学生向けの副読本として3月末に発行した『出会い？発見?!感動!!中也読本』（B5判・オールカラー64ページ）は、平成27年度当初に市内の全中学校に無償配布します。

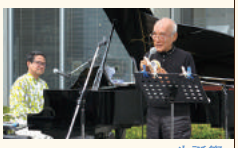
主なできごと（平成26年度　記念館事業・関連行事記録）　2014年4月—2015年3月

4月1日　特別展示：震災復興応援企画（前年度から継続）
　東北を中心とした文学館の紹介、和合亮一、須藤洋平の詩を展示

23日　特別展示：第19回中原中也賞（～5月25日）
　大崎清夏『指差すことができない』

25日　第119回 中原中也を読む会
　第19回中原中也賞受賞作
　大崎清夏『指差すことができない』を読む

29日　生誕祭「空の下の朗読会」（中原中也記念館前庭）
　自由参加の朗読（朗読参加者70名）
　谷川俊太郎、谷川賢作　朗読、コンサート


生誕祭

第19回中原中也賞贈呈式（山口市民会館）
　受賞詩集：大崎清夏『指差すことができない』（アナグマ社）
　　プロローグ「一つのメルヘン」「雲雀」「（南無ダダ）」
　　出演：加藤舞踊学院
　　トークセッション「中原中也、その愛と魅力と謎」
　　出演：川上未映子、穂村弘
　　主催：山口市、（公財）山口市文化振興財団

5月4日　ことばとあそぼう～子どもための詩作ワークショップ～（～5月6日）
（クリエイティブ・スペース赤れんが）
　講師：和合亮一、唐沢優江

23日　第120回 中原中也を読む会
　屋外展示「空の詩」を読む—「朝の歌」「言葉なき歌」

6月27日　第121回 中原中也を読む会　企画展Ⅰ「中原中也記念館の20年」見学

7月13日　中原中也詩英訳パネルディスカッション（ホテル松政）
　パネリスト：伊藤比呂美、ジェフリー・アングルス、
　　アーサー・ビナード、四元康祐

25日　第122回 中原中也を読む会　アルチュール・ランボーの詩を読む

31日　特別企画展「中原中也と日本の詩」（～9月28日）
　オープニングセレモニー開催

8月3日　プロムナード・トーク①　特別企画展解説

10日　装幀ワークショップ①初級編「ブックカバーを作ろう」（山口情報芸術センター）
　講師：山口智子

22日　第123回 中原中也を読む会　特別企画展「中原中也と日本の詩」見学

24日　プロムナード・トーク②　特別企画展解説

31日　機関誌「中原中也研究」第19号発行

9月7日　プロムナード・トーク③　特別企画展解説

13日　公開講演「世界文学のなかの中原中也」（ホテルニュータナカ）
　講師：福間健二
　共催：中原中也の会

14日　特別講演「自分をこじらせた詩人、あるいは青春のむずかしさ」
（ホテル松政）
　講師：池澤夏樹

15日　中原中也賞詩人によるブックトーク（喫茶ぼなーる）
　出演：三角みづ紀、暁方ミセイ

21日　装幀ワークショップ②中級編「文庫本の装幀をしよう」（山口情報芸術センター）
　講師：山口智子

26日　第124回 中原中也を読む会　小林秀雄と中原中也

10月1日　企画展Ⅱ（YCAMコラボレーション企画）
「中原中也　歩みのリズム—〈僕は街なぞ歩いてゐました〉」
（～平成27年1月25日）

開館20周年特別番組 エフエム山口
「愛の詩—いとしい人へのメッセージ—」（～10月29日）

9日　特別展示「中原中也と日本の詩」（～11月5日）（国文学研究資料館）
　主催：国文学研究資料館、（公財）山口市文化振興財団、中原中也記念館

11日　映画で知る中原中也（山口情報芸術センター）
　第1弾　「野のななのか」上映（～10月13日）
　　ゲスト：大林宣彦、大林恭子　聴き手：中原豊
　第2弾　中也が見た映画partⅠ（10月17日～10月19日）
　第3弾　「眠れ蜜」特別上映、中也が見た映画partⅡ（10月24日、25日）

19日　中也忌～墓前祭と中也に捧げる夕べ（経塚墓地、中原中也記念館）

22日　中也命日、お墓参り

24日　第125回 中原中也を読む会
　福田名誉館長と「月夜の浜辺」を読む

26日　Poetry Session Final（中原中也記念館前庭）
　主催：平成DADA実行委員会
　協力：中原中也記念館

Poetry Session Final

11月28日　第126回 中原中也を読む会　企画展Ⅱ（YCAMコラボレーション企画）
　「中原中也　歩みのリズム—〈僕は街なぞ歩いてゐました〉」見学

12月26日　第127回 中原中也を読む会　蓄音器で聴く中也が聴いた音楽

1月23日　第128回 中原中也を読む会
　屋外展示「空の詩」を読む—「港市の秋」「春の日の歌」

28日　企画展Ⅱ（コラボレーション企画）下瀬信雄写真展「さやかに風も」
（～4月12日）

31日　企画展Ⅱオープニングセレモニー

2月18日　開館21年

第12回テーマ展示「中也　祈りの詩」（～平成28年2月21日）

27日　第129回 中原中也を読む会　種田山頭火の俳句を読む

28日　山口お宝展（～4月5日）
　原稿「夏の記臆」「秋の夜に、湯に浸り」、歌集『末黒野』の特別展示

3月1日　特別展示：中原中也「盲目の秋」と東日本大震災
　全国文学館協議会加盟館との共同展
　「3.11　文学館からのメッセージ」への参加企画（～3月29日）

21日　中也に捧げる夕べ～VOICE SPACE at 中原中也記念館～
（中原中也記念館）

27日　第130回 中原中也を読む会
　企画展Ⅱ下瀬信雄写真展「さやかに風も」見学

28日　トークイベント「中原中也記念館の今日まで、そして明日から」
（中原中也記念館）
　出演：福田百合子、中原豊

31日　館報第20号発行

中原中也の会

6月7日　中原中也の会第18回研究集会
「丸山薫と中原中也——四季派の抒情——」（愛知大学豊橋キャンパス）
　総合司会：青木健
　講演「海に人魚はいないか——丸山薫と中原中也の幼年について」
　　講師：北川透
　パネルディスカッション
　「丸山薫に照らして「抒情」を問う——中原中也と同時代の詩人たち」
　　パネリスト：宇佐美斉、安智史、加藤邦彦　司会：権田浩美
　　共催：豊橋市、愛知大学

7月31日　会報第35号発行

9月13日　中原中也の会第19回大会「現代詩の中の中原中也」（ホテルニュータナカ）
　総合司会：二木晴美
　講演「世界文学のなかの中原中也」
　　講師：福間健二
　アトラクション　和田名保子コンサート「月によせて」
　トークセッション「中原中也と現在——わたしたちが語る中也」
　　出演：渡辺玄英、三角みづ紀、暁方ミセイ

14日　中原中也の会第15回セミナー（ホテルニュータナカ・中原中也記念館）
　講演「中原中也詩英訳パネルディスカッションをめぐって」
　　講師：中原豊

　特別企画展「中原中也と日本の詩」見学
　　解説：池田誠

12月　会員名簿発行

25日　会報第36号発行

◎第20回中原中也賞

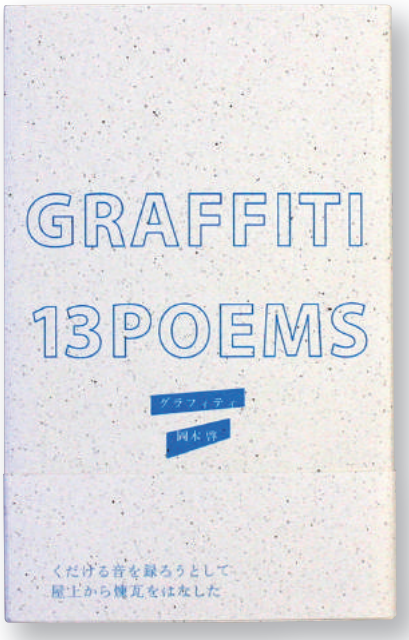
『グラフィティ』

岡本（おかもと）啓（けい）氏

第20回の中原中也賞は、公募および推薦による202点の詩集の中から、岡本啓氏の『グラフィティ』（思潮社）が選ばれました。

岡本氏は昭和58年生まれの31歳（受賞時）。仙台市出身で、東京大学を卒業し、平成23年から「現代詩手帖」へ投稿をはじめ、平成26年には第52回現代詩手帖賞を受賞しています。

受賞作『グラフィティ』は、岡本氏の第一詩集で、巻頭の詩「コンフュージョン・イズ・ネクスト」の他、全13篇の作品を収録しています。収録された作品のほとんどはアメリカ滞在時に書かれたもので、最終選考会では〈世界に対する肯定性〉、〈内閉的にならず、外へ出て行って言葉と対峙する〉姿勢などが高く評価されました。



弟、おまえが
吹きつけていたのは苔だったか
あるいは壁の層に
埋もれていた花だったか
とつぜん、はっきり聞こえた
言葉をふかく柩にしろ
そう聞こえた
単純に
ぼくは言葉で木をつくりたい
言葉で、釘とノコギリを
飾りボタンと、もっとたくさんのボタンと
たくさんの写真と、スプレー缶と、花と
これらを燃やす
火を

（「グラフィティ」より）

動詞の現在形を駆使して、自らのアクションで主体の世界をかたち作る。ナルシシズムがないこと、明るさと線の太さ。世界に対する肯定性が貴重であった。ただし、作者にはまだ何も始まっていない。熱のある出来事を待ち受ける時期の作品だと見受けられる。いわば、野球を知らないでバットを振り回している素朴さのなかにある。（「選評」より）

Chuya Nakahara prize 20th

◎平成27年度　記念館事業・関連行事予定　2015年4月—2016年3月

展　示

平成26年度企画展Ⅱ
下瀬信雄写真展「さやかに風も」
（1月28日～4月12日）

第12回テーマ展示「中也　祈りの詩」
（2月18日～平成28年2月21日）※特別企画展会期中を除く

企画展Ⅰ「中原中也賞の20年」
（4月15日～7月26日）

特別企画展「萩原朔太郎と中原中也」
（7月30日～9月27日）

企画展Ⅱ「中也の住んだ町—新宿」
（9月30日～平成28年4月17日）

第13回テーマ展示「外国文学」（仮）
（平成28年2月24日～平成29年2月下旬）

イベント

生誕祭「空の下の朗読会」〈無料開館日〉
（4月29日　中原中也記念館前庭）

こどもの日〈無料開館日〉
（5月5日）

中也忌～墓前祭と中也に捧げる夕べ
（10月下旬）

中也命日・お墓参り〈無料開館日〉
（10月22日）

開館22年
（平成28年2月18日）

中原中也を読む会

毎月　第4金曜
中原中也記念館、山口情報芸術センター

中原中也の会

中原中也の会第19回研究集会
（6月27日　前橋文学館ホール）

中原中也の会第20回大会
（9月12日　ホテル松政）

中原中也の会第16回セミナー
（9月13日　ホテル松政・中原中也記念館）

※日程等、変更の場合もございます。

中原中也記念館 館報【第20号】 平成27年3月31日
発行◎ 中原中也記念館　〒753-0056　山口県山口市湯田温泉1丁目11-21　TEL 083-932-6430　FAX 083-932-6431　E-mail:chuyakan@c-able.ne.jp　http://www.chuyakan.jp/
【表紙】中也18歳頃の肖像写真〈大正14年に銀座の有賀写真館で撮影〉と中也が中原家で使用していた机
環境に配慮し、用紙には再生紙を使用しています。印刷インキは植物油インキを使用しています。